

1/2 Broken Eva

Blue Light Yokohama

Time

Sleeping Beauty

Body And Soul

Last Dance

Well Well Well

HAPPY BIRTHDAY

ハッピー・バースデー

Hisao Hiruma

比留間久夫

HAPPY BIRTHDAY

ハッピー・バースデー

Hisao Hiruma

比留間久夫

河出書房新社

ハッピー・バースデー

一九九〇年十一月五日 初版発行
一九九〇年十一月二六日 再版発行

著 者 比留間久夫

装 丁 菊地信義

装 画 倉科昌高

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一(営業)
四〇四―八六一一(編集)

振替口座 (東京) 〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

© 1990 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4―309―00638―1

比留間久夫(ひるまひさお)
一九六〇年、東京生まれ。都
立福生高校卒業。『YES・
YES・YES』で第二十六
回文藝賞受賞。

¥1200

ハッピー・バースデー 目次

1	エバちゃん半狂乱	5
	1/2 Broken Eva	
2	ブルー・ライト・ヨコハマ Blue Light Yokohama	33
3	宇宙の神秘なる時の流れ Time	71
4	スリーピン・ビューティー Sleeping Beauty	109
5	ボディ・アンド・ソウル Body And Soul	145
6	ラスト・ダンス Last Dance	175
7	夜ははじまったばかり Well Well Well	179

ハ
ッ
ピ
ー
・
バ
ー
ス
デ
イ

1 エバちゃん半狂乱

1/2 Broken Eva

エバちゃんは今日も浮かれている。

どう見ても破綻の前兆としか思えない。

ハシヤげばハシヤぐほど悲しく見える――

そんな言葉がつついっと思い出される。

さっきまで破廉恥なフレンチカンカンの踊り子たちよろしく、脚を宙高く蹴り上げる妙技を競っていたジゼルさんも、エバちゃんのいつ果てることのない陽気さに疲れて、今はそれを横目に、チーママのチェミさんとこんなふうに話をしている。

「エバはもうダメね、完全にどこかにいつちやってるわ」

「そうね、今度は本格的に危ないかもね。四六時中誰かが見張ってないと、朝起きたら、

てるてる坊主さんオハヨウってパターンだわ、あれは」

バンビは『てるてる坊主』って言葉の意味がわからずに、隣りにいたラララに、

「ねえ、てるてる坊主って何だか知ってる？」と、聞いた。

ラララは一瞬、ゾッとしたような表情を思わず浮かべると、青いパールの入ったマニキュアをまばゆい照明にキラキラさせて、指を首に当て、バンビに首をくくる真似をして笑って見せた。

ラララはバンビとほぼ同じ時期に店に入ったコだ。今からだいたい三か月ぐらい前の話。でもラララはバンビより約一年分、この世界に詳しい。それはバンビがこの店が初めてのまっさらな新人なのに対し、ラララはこの店に来る前に新宿の『ベビー・ドール』という店に一年ぐらいいいたからだ。なんでもそこにいたところをママに懇意にくどかれて、この店に移ってきたという。年齢はまだバンビと同じ、*Bitter Sweet Sixteen* だ。

「エバさん、何かあったのかしら？」

ラララは、客の喝采やみんなの乱痴気な囃し声を浴び、いよいよ調子にのり、あたりかまわず客に抱きついたり、キスしたりしている、エバちゃんを目で追いつらさずこし心配そうな顔をした。

ほんとエバちゃんたら、まるで尋常ではない。やっと店に出て来るようになったかと思

えはこの調子だ。「ヒュー」とか「キヤー」とかやたら陽気な嬌声をあげては、不意に踊りだしたり、マレーネ・ディートリッヒみたいな——エバちゃんはどこことなく横顔がこのセピア色したムービー・スターに似ているのだ——艶美なポーズを前後の脈絡もなく、突然、気取ったり。誰かれの客ともかまわずテーブルからテーブルへと移り変わり、そこで一騒ぎ起こしては、みんなに鼻白まれたり、追い払われたり。ほんと落ち着きがない。そりゃエバちゃんがきつと三日間は夢心地でいられそうなほど、クスリをたらふく飲んで、ラリパッパになっているのはみんなならずともわたしも知っている。けれどクスリだけであんなになるものじゃない。明るいか、楽しませるとか、そういうことが商売のバンビたちから見ても、エバちゃんはどこかいきすぎなのだ。それを証拠にエバちゃんはひとたび席に落ち着いてしまうと、だんだん塞ぎこむような沈んだ顔になっていく。それでまた素っ頓狂な声を出し、悪霊でも追い払おうとするみたいに、席を立ち上がっては騒ぎはじめ。ここ二、三日ずっとその繰り返しだ。

「エバ、いいかげんにおし！」

チーママのチェミさんが、自分の客に手をつけられて、とうとう大きな声を出した。

別にエバちゃんがチップをせがんだわけでもないのに、気のいい若い客が、キスとあそこをいじくってくれたお返しにと、金を出そうとしたからだ。

エバちゃんは「まあ怖い！」と子猫のようにビョンと跳びはねると、モンロー・ウォークでおどけながら、自分の客がいる舞台横の席の方に涼しげに歌うように逃げていった。エバちゃんはこの二か月、とんと店に顔を出さなかった。いわゆる無断欠勤ってやつ。ママは何度かエバちゃんのところへ電話をかけた。しかしその都度、会話は要領を得ないみたいで、電話はいつも決まって、強い音を残して切られた。

ガチャン！

エバの病気がまたはじまった……ママはそうぼやいた。

バンビが「エバさんどうかしたんですか？」と聞くと、

ママは、あんたに言ってもしょうがないことなんだけど、エバはこの季節になると、疲れたあの、いやになったのだと言い出すのよ、と、こぼした。

まあ、エバの持病みたいなものなんだけどね。

今、ママは、向うの席でエバちゃんが事を起こす度、「しょうがないわね」といった顔で客と愛想笑いしながらそれを見ている。別にエバちゃんは客に迷惑をかけるでもなし、それにかえってそういう騒ぎはこういう店の看板みたいなものだから、ママはまったく気にもとめてないみたいだ。

「ママがね、玉取っちゃうとホルモンのバランスが崩れて、時々、ああなっちゃうんだっ

て言ってた。定期的にね、ひどく情緒不安定になっちゃうんだって。それでね、エバさんの場合、それが特にひどいんだって」

バンビはママが言ってたことをちょっといやな気分とともに思い出し、客がトイレに行ったのを見計らって、そのままをラララに話した。

ラララはしばらくの間、コンパクトで化粧を丹念に点検しながら気もなさそうに黙っていたが、不意にバンビの方に顔を向けると、

「でも、そうならない人も、あたし知っているわよ」

と、怒ったように言った。

バンビはちょっとびっくりした。ラララの子供っぽさの残る人懐っこい顔はそのままだったが、目は何か訴えかけるように真剣だったからだ。

「あたしが前にいた店でも、玉取ってる人、何人もいたけど、みんなだいじょうぶだったもの」

「そう……」今度はバンビが黙った。

「でも、ほらエバさん、週に四百ccもホルモン打ってるって聞くし」

「あら、あたしだって打ってるわよ、二百ccだけど。だって、そういうバンビも打ってるんでしょ？」

「うん……」

バンビもリンダさんに勧められて、つい半月程前から打っていた。最初はからだの中で何かが喧嘩しているみたいに理由もなくイライラしたり、ひどく辛くなったりしたが、最近はずしおさまり、それほど不快にはならなくなった。けれどやっぱり打ったその日は死ぬほどだるいし、何もやる気がなくなって、すぐベッドに倒れ込んでしまう。そしていくら眠っても寝足りない。

「あたしね、思うんだけど、きっとそうなるんじゃないは、結局のところ、その人の性格だと思ふのよね。ほらエバさんてなんか線の細そうな人でしょ？ 内向的っていうのかな、すぐ内にこもっちゃうようなさ」

ララは首をちよつと傾け、エバちゃんの方を見た。

「だってチエミさんとかレオさんは平気じゃない？ 竿^いまで取ってるのにさ」

「うん」バンビもうなずいた。

「ねっ、それってやっぱり性格でしょ？ だってチエミさんとかレオさんときた日には、ほんと鬼のように気が強いじゃない？ もう何があつたって全然動じないっていうかさ、ゾウが突進してきたってだいじょうぶって、いうかさ」

うん、バンビもうなずいた。

「……ほんと、あの人たちの気の強さってきたら、ハンパじゃないもんね」

パンビはさっきのチェミさんの怖い顔を思い出し、笑った。

「でしよう？ もうほんと、お勉強になっちゃうぐらいにさ」

ララもチェミさんの方をちらっと窺うと、パンビにしかめっつらを作って、「たまりませんわ」って顔で笑って見せた。

チェミさんは相変らず中央の席で真ん中にどしんと構え、お客さんや、ほかの一癖も二癖もある、こわもてのお姉さんたちを配下のように従え、見下ろし、テーブルを縦横無尽に取り仕切っている。ほんと余裕がある。まるで夜の女王様のように毅然とし、すこしもだらしないうところがない。さながらゲイボーイ版、横綱相撲でも見ているようだ。

チェミさんでも落ちこむ時なんてあるのだろうか？

パンビはふとそう思う。

「でもさ、エバさんでそういう感じじゃないもの。どこことなく線が細いっていうかさ、影が薄いっていうか」

ララは再びエバちゃんに視線を戻すと、パンビにそう言った。

うん、そうだね。パンビもうなずく。

「エバさんで、決して気が強い方じゃないもんね」

パンビもほんと、ラララの言う通りだと思う。

エバさんは久しぶりに店に出て来た日、客の一人を、美香さんというわがままご勝手な人に——といってもみんなそうだが——取られていたことがあった。

普通ならそういう時、いつもの例として、必ず一悶着持ちあがるのだが、エバさんはただ、悲しい目で、それを見ていただけだった。まるで恋人にでも裏切られたような悲しい目をして。

たかが客なのに、放心したように。

パンビは今でもあの時のエバちゃんの悲しい顔が忘れられない。そしてそれと同時に心の底から美香さんがきらいになった。やっと店に出て来たのに、あんな心ない出迎えはあったものじゃない。

……むろん、しかたのないことだとも、後で思い返したけれど。

「あたしね、思うんだけど、エバさんてさ……」

ラララはそこまで言いかけると、すこし何か考えるようにうつむいた。いくぶん声が湿っぽい。

「……ほらエバさんてさ、なんかこういう世界の人には珍しく、変に気が優しいところがあるじゃない？ 虫も殺せないっていうかさ。うん、もちろんあたしエバさんのそういうと

こ好きよ。でも、そういうとこってこういう世界ではマイナスにもなるんじゃないかって、あたし思うのよ」

「マイナスって？」バンビは聞き返した。

「うん。これはね、あるお医者さまから聞いた話なんだけど、優しいってことはある意味で、心が弱いつてことを象徴する時があるんだって。それでね、そういう人間ほど、つまらない暗示にかかりやすいものなんだって。ほら、精神病患者でも自分を本当にそうだと認めちゃうと、ミイラ取りがミイラになるじゃないけれど、本当にそうなっちゃう場合があるじゃない？ 実際はそうじゃないのに。でもね、自分を決して気違いだなんて思っていない人間は、人が何て言おうと、絶対、気違いなんかにはならないんだって。その人はとても正常なんだって。その先生いわく、とっても健康なんだって。それでね、だからなんていうか、……あたしも本当その通りだと思ったのよ、先生のお話を聞いててさ。だからね、ええと、……」

ラララはそこまで言うのと、言葉に窮してしまったのか、額に指を当てた。

バンビにはラララの言いたいことがなんとなくわかった。

「……やだ、あたし何を言いたいのかわからなくなっちゃった」

ラララは不意に哀しそうに笑うと、子供のように舌を出した。

うん、わかる。パンビは言った。

「だから、要は、心の問題だってことでしょ？」

パンビは笑った。

そう、そうなの。ラララも嬉しそうにうなずいた。声がすこし涙っぽい。

「だから、そう、強い心を持ってさえいれば、何がきてもだいじょうぶだってことなのよ。ほら、よく病は気からっていうじゃない？」

ラララはすこし照れたようにはにかむと、まるで自分に言い聞かせるように、パンビに笑った。

「うん、わかるよ」

パンビもラララの目を見つめながら、うなずいた。

——また一人、新人のゲイボーイが誕生したってわけね。

エバちゃんは遊びにきていたママの部屋で、初めてパンビを見た時、そう微笑んでパンビを迎えてくれた。それはきつと幾度となく繰り返されてきたルーティンの挨拶だったのだらうけど、パンビはその時、エバちゃんの瞳が、ほんと妹を見るように優しくったのを